

その衰退の過程と要因を追究する。明治初期においては、川蒸気船の就航、見沼通船会社の設立など、なお水運の盛況を指摘するが、栃木県・埼玉県下の河川水運の状況をつぶさに検討され、結局は明治16年以降の鉄道の普及発達と、明治30年代以降の河川改修工事や取水堰の建設等によって衰退するという結論をみちびき出している。

第11章は、関東を離れて、越後信濃川水運を問題とする。特に信濃川沿岸与板町の廻米問屋備前屋を中心に、地方豪商の経営を分析し、その経営規模の拡大と大名貸・大板廻米との関係、宝暦期を転機に衰退してゆく過程などを、信濃川水運との関連で追究している。

以上が、本書の概略であるが、著者の意図するところを十分に紹介できたかどうか心もとない。読者諸氏は直接本書をひもといて、博学多識な著者の論述に接していただきたい。そこにおいて著者は、多くの史料を駆使しながら、細かい事実を積み重ねて理論を実施していく。それが前述のように研究の少ない河川水運史という分野であるだけに、本書の持つ意義は非常に大きい。学会に寄与するところ多大であることは疑いないところである。

なお最後に、関東河川水運史関係史料として、上利根川の河田家文書・北川家文書・高橋家文書・清水家文書等の内から重要なもの67点が収録されており、研究者に多大の便宜を与えられていることを附記しておきたい。
(川名 登)

川村博忠著 江戸幕府撰国絵図の研究：古今書院、1984年、A 5判、534頁

昨今、地図史ないし地理学史上の既往の業績に対し、これらが進化論的<パラダイム>にたつという理由で、一概に貶めることが、一部の人びとの間で流行しているそうである。私としても、例えば古拙な絵地図の中から、それを生んだ社会の世界観を抉剔する彼らのメスの動きを鮮かとするにやぶさかではないのだが、ここにとりあげる川村博忠博士の内実のつまった鬱然たる大冊を前にすると、才あるかの人たちの<解説>の試みなどは、とたんに単なる<知的遊戯>にすぎなかったような錯覚におちいるのである。

従来とも幕府撰国絵図のもつ重大な意義は誰しもの承知するところだったが、研究の実情は、各研究者が何らかのゆかりをもつ個別国絵図の考証に沈潜

するか、あるいは一般研究としては、かの「好書故事」に近藤守重が僅かに書留めたところを、ほとんど唯一の拠りどころとする有様で、日本地図史・日本地理学史の概説書の類にも、せいぜい一節か一項をもうけ得る程度の研究・史料の蓄積しかもたなかったのである。川村氏は、このような水準にとどまっていた国絵図研究の領域に、一挙に龐大な史料群を搬入し、それだけでも本書の価値を高からしめるに十分なのだが、それらの精緻な分析を通して、記載内容・絵図様式から、国絵図作成にかかわる幕藩両サイドの組織、彼ら絵図方役人の実務等々にまでわたって、このプロジェクトの全容を明らかにしてみせたのであった。しかも、それは単に最初の体系的研究というにとどまらず、随所に新しい知見がちりばめられているのである。

このめざましい成果は、関連研究文献の徹底した博搜、諸藩側の史料の飽くなき渉猟のたまものであると思う。つまり、これらの<発見>は、たまたま仄いたアイディアとか思いつきの類ではなく、上記の博搜と渉猟がもたらした山積する諸データを、入念に照合検討してゆくと、必然的に、そこに到達すべくして到達するというようにして、氏が見出した新天地なのである。この浩瀚な書物を限られたスペースで紹介することは困難でもあり、無意味にも思えるので、以下には努めて、この種、研究史に加えられた新たなページを中心に述べさせていただく。

本書は「序論」と「結論」との間を、第1篇「東洋における官撰地図の系譜」、第2篇「江戸幕府撰国絵図の系統的研究」、第3篇「江戸幕府撰日本総図の展開」、第4篇「国絵図調整の個別的研究」で構成する。いきなり苦言を呈して恐縮だが、第1篇はわざわざ独立の篇だてにするまでもなく、「序論」の「一、研究史の概観」に吸収させるか、あるいは「二、本研究の目的」において、中国そしてわが国古代律令国家以来の伝統の官撰地図・地誌事業の系列のなかに位置づけて、今回のテーマも扱われるものであることを述べればよかったと思う。というのは同じく「篇」といいながら、第2篇以下は質・量ともに充実度が違うからである。

第2篇こそが本書のメインであり、慶長(第1章)、寛永(第2章)、正保(第3章)、元禄(第4章)、天保(第5章)の各期の国絵図を、順次、研究対象とする章節構成である。第1章では、これまでに知

られていた越前、摂津、筑前、肥前（鍋島家旧蔵）、播磨* などのほか、周防・長門、肥前（松浦家旧蔵）、備前*、阿波* などの慶長国絵図もしくはかく想定される絵図（*印）を学界に紹介し、諸図の規格・図式・注記・高頭目録・色分凡例等々を対比して、此期の国絵図の一般的特色を剔出している。即ち国郡図としての基調は備えながら、縮尺・図式・注記等および「村」などの単位集落が地方ごとに多様なことなどが列挙されている。つぎに第2章として、正保ではなく寛永の国絵図が扱われることだけでも、本書の重大な功績の一つと認めてよいであろう。つまり、寛永10年の幕府巡見使の国廻りに伴って国絵図の収納が行なわれた事実を、備前・備中その他諸藩の史料からつきとめ、従来の国絵図調進4回説に根本的な修正を求めているわけだが、これはさらに第3篇の「寛永日本図」の新説を生む導火線となる。

第3章の正保絵図については、これまでも比較的調べられていたので、縮尺や図式の統一という地図史的意義、また今回に限り城絵図提出をも伴うその政治史的・軍事的意義などの記述も、必ずしも目新しいわけではない。むしろこの正保図とつぎの元禄図については、第4篇において詳細に展開されている諸藩の幕命への対応ぶりの追跡が圧巻である。なお、かつて拙著『都市図の歴史——日本編』において、近藤守重が「新国絵図重修ノ時ノ令ナルコト疑ヲ容レズ」として「好書故事」に収載した「国絵図可仕立覚」は、実は正保時の令条ではあるまいかと「疑ヲ容レ」ておいたのだが、やはりこれは守重の誤認であったことを、川村氏は史料の裏づけをもって明らかにしてくれている。また、本章の「補論 明暦大火被災による正保国絵図の再提出について」も、表題どおりの興味ぶかい事実を鍋島家文庫の一史料を手がかりに〈発掘〉した報告である。

第4章の元禄国絵図においては、正保以来の様式の統一方針が紙質や裏張りの仕様にまで及び、大方の場合、狩野良信によって齊一的な流儀による清絵図に仕立てられる等、形式面での完成度もさりながら、内容的にも「幕藩制国家の確立」を意味するものに到達している点に、読者の留意を促している。即ち元禄の改訂では、古（正保）絵図との異同個所のチェック、とくに隣接所領間における国境・郡境の調整に意の用いられたことは、従来とも説かれたところであるが、川村氏はさらに、郡名・村名の改

正、「村」による単位名称の統一（この点については貢納地域単元としての藩政村の設定とその把握という幕府の意図を、もっと強調すべきだったと思う）、そして大単位の領分記載が払拭され、国郡図としての性格が貫徹された点を明らかにした。第5章でも、天保の国絵図・郷帳が、既往の概説のように元禄のそれの単なる踏襲ではなかったこと、つまり石高記載において元禄までの表高に代って実高が求められたこと、諸藩から提出させた懸紙による元禄絵図の修正図を、幕府の勘定所で一手に改訂する方式が採られたこと等々の新しい知識がわれわれに提供されている。これもまた、萩藩をはじめ仙台・秋田・金沢諸藩に遺された史料の執念ぶかい追求による産物である。

第3篇は「国絵図収納に伴う日本総図」（第1章）として、寛永・正保・元禄の各日本図を、そして第2章として享保日本図を論ずる。この篇で最も注目される業績は、これまで慶長期に作成された図を寛永期に修正し再製されたものと解されてきた、国会図書館蔵のいわゆる「慶長日本図」は、実は「寛永日本図」と改称されるべきものであるとする主張・論証である。従来の説は、前掲の第2篇の寛永国絵図調進事業の存在に気づかぬままに下された推定だったわけだが、川村氏は寛永15年、大目付井上政重より萩・広島藩などに日本図編修を理由に国絵図提出を要請している史料を発見し、この新説をうち出したのであった。この章では、この他、例によって各期の日本総図の編修方法や図形の精度等々が対比され追求され、ここでも幾つかの新たな解釈が提起されている。例えば正保日本図の編修に関しては、北条正房の「諸國道度」は、芦田伊人氏以来説かれ続けてきたとき道路実測図ではなく、諸大名より報告させた道程資料の集成にすぎないこと、いわゆる正保日本図は慶安初期に成立するが、前記の明暦大火の影響で、国絵図の再調進後、寛文年間に再編修されたこと等である。もっとも北条正房の道度調査については、彼の明暦・万治の江戸実測チームに参加していたと想定される遠近道印が、かの「東海道分間絵図」の板行に先立ち、京一江戸間、江戸一金沢間の実測図を作成している（拙稿「遠近道印に関する新解釈」日本海地域史研究4、および「江戸前期測量術史割記」日本学報3）、正房が幕府に提出したのは道程表にすぎなかったとしても、彼の配下がこの機に乗じて、主要街道の分間絵図の

下図づくりに動かなかったとは断言できないと思う。つぎに、享保日本図の作成に望視交會法が用いられたことは、既刊の書物にも述べてあるが、この第2章では、幕府方のみでなく藩側、とくに熊本藩などの史料により、方位資料の収集調査、編修方法やその補訂など一連のプロセスがきわめて具体的に復原されている。

第4篇は前にも少しくふれたように、肥前の慶長・正保図、周防・長門の正保・元禄図、陸奥仙台領・筑前・伊賀の各元禄図の作成にかかわる個別研究、7論文よりなる。評者は幸に、これらが雑誌に発表された都度、抜刷や、さらには一部史料の写真の焼増しの恵とにあずかってきたが、もし、今般、初めて本書によって<川村博忠全仕事>に接する人があるとすれば、恐らく第3篇までを通読するだけで根気が尽き、これらの細密な個別研究のページを繰ることをためらうのではあるまいか。

すでに書評に与えられた紙数の方も尽きてきたので、あとの紹介は端折らざるを得ないが、「結論」では、江戸幕府にとって、国絵図は土地台帳たる郷帳とともに中央政府が官庫に完備し保管すべき国土基本図と意識され、そのため大名所領単位ではなく律令制以来の国郡図としての基調が踏襲され、規格・図式・記載内容の統一を重視したこと、しかも現実には、各期の国絵図はそれぞれの時点における「幕藩制国家体制の生成、確立、動揺の展開過程に対応」した差異の認められること、等々の個条が総括として述べられている。これ自体、まことに要領のよい「結論」となっているが、本書の価値はもとより、このような要約にあるのではなく、ここにいたる道程、つまり龐大な史料と史実の記載にこそ存するであろう。

なお、口絵として長門の慶長図、周防の慶長・正保図、備中の寛永図、備前の元禄図のカラー写真、また英文要旨の他、巻末には、国絵図関連の「用語解説」、「江戸幕府撰国絵図・日本総図関係史料の所在」（昭和58年現在、著者の確認分）が付してある。第4篇の第1章「肥前国絵図及び関連絵図類の現存状況」ともども、幕府の国絵図事業に対処すべく遺された各地元の史料の整理・分類作業にとって、有用なマニュアルとなるであろう。

思えばあれは、今般、第4篇の末尾に収録されている伊賀の元禄図のことを「史学研究」に書かれた頃であったか、——ニュー・ジオグラフィーなどのかまびすしい中において、川村氏は、ただただ史料を発掘しては活字化し、絵図作成にかかわる瑣末な手順を、<実証的に>記述してゆく御自分の仕事に、何ほどの意味があるものかと自信無げにしておられる一時期があったように思う。その時、私は「いやこういう仕事こそが後に残るのですよ」というような返答をした記憶がある。もとより本書は未だ十全ではなく、三、四年前から東大史料編纂所を中心に科研費一般研究によって、全国的な国絵図荘園絵図の所在調査が行なわれ、慶長国絵図をはじめ、新たな多くの史料が発見されたし、多分その研究組織の牽引車的役割りを果された御一人と思われる黒田日出男氏からも、幾つかの注文が川村氏に出されている（同編纂所報15号など）。このような状況は川村氏自身よく御承知であり、今後のさらなる発展を心に期しておられるであろう。しかし、それはともかく、爾今、この分野を攻究する者は、何人もこの仕事を避けては前へ進めまいと思われる底の基本的図書、いわば<古典>を、若くしてものされた著者に、畏敬と羨望の念を禁じ得ない。（矢守 一彦）